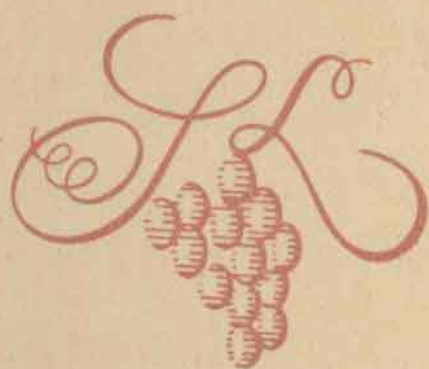


新潮文庫

刺青・秘密

谷崎潤一郎著



新潮社

し せい ひ みつ
刺 青 ・ 秘 密



定 価 240 円

新潮文庫 草5C

昭和四十四年八月五日 発行
昭和五十四年六月二十五日 十八刷

著 者

谷 崎 潤 一 郎
ざき じゆん いち ろう

発 行 者

佐 藤 亮 一
さとう へい いち

発 行 所

株式 会社 新 潮 社
郵便 番号 一六二

東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛へ送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

刺 青 ・ 秘 密

新 潮 社 版

目次

刺	青		七
少	年		元
幫	間		叁
秘	密		七
異端者の悲しみ			一三
二人の稚児			一九
母を恋うる記			二三

解説 河盛好蔵

刺
青
•
秘
密

刺^し

青^{せい}

それはまだ人々が「愚^{おろか}」と云う貴い徳を持っていて、世の中が今のよう激しく軋^きみ合わない時分であつた。殿様や若旦那の長閑^{のどか}な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁^{おいらん}の笑いの種が尽きぬようにと、饒舌^{じやうぜつ}を売るお茶坊主だの帮間^{ほうかん}だのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりしていた時分であつた。女定九郎^{おんなさだくろう}、女自雷也^{じらいや}、女鳴神^{なるかみ}、——当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜^{みにく}い者は弱者であつた。誰も彼も^{こそ}挙^こつて美しからむと努めた揚句は、天稟^{てんぴん}の体へ絵の具を注^つぎ込むまでになつた。芳烈な、或は絢爛^{あはれ}な、線と色とがその頃の人々の肌^{はだ}に躍^はつた。

馬道を通うお客は、見事な刺青^{はりもの}のある駕籠舁^{かごかい}を選んで乗^のつた。吉原、辰巳^{しんみ}の女も美しい刺青の男に惚^ほれた。博徒^{とく}、鳶^{とび}の者はもとより、町人から稀^{まれ}には侍^{さむらい}なども入墨^{いれずみ}をした。時々兩國で催される刺青会では参会者^{かりもの}のおの肌を叩^{たた}いて、互に奇抜な意匠を誇り合い、評しあつた。清吉と云う若い刺青師の腕^{うで}ききがあつた。浅草のちや、文、松島町の奴平^{やつへい}、こん、次郎などにも劣らぬ名手であると持て囃^{はや}されて、何十人の人の肌は、彼の絵筆の下に純地^{じゆんち}となつて拡げられた。刺青会で好評を博す刺青の多くは彼の手になつたものであつた。達磨金^{だるまきん}はぼかし刺^{はり}が得意と云われ、唐草権太^{からくさ}は朱刺^{しゆぼり}の名手と讃^{たた}えられ、清吉は又奇警な構図と妖艶^{ようえん}な線とで名を知られた。もと豊国貞の風を慕^もつて、浮世絵師の渡世をしていただけに、刺青師に墮落^{だらく}してから清吉に

もさすが画工らしい良心と、鋭感とが残っていた。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持つ人でなければ、彼の刺青を購う訳には行かなかった。たまたま描いて貰えんとしても、一切の構図と費用とを彼の望むがままにして、その上堪え難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらえねばならなかった。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んでいた。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで脹れ上る肉の疼きに堪えかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、その呻きごえが激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであった。刺青のうちでも殊に痛いと言われる朱刺、ぼかしぼり、——それを用うる事を彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする為め湯へ浴つて出て来る人は、皆半死半生の体で清吉の足下に打ち倒れたまま、暫くは身動きさえも出来なかった。その無残な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「さぞお痛みでがしょうなあ」

と云いながら、快さそうに笑っている。

意気地のない男などが、まるで知死期の苦しみのように口を歪め齒を喰いしぼり、ひいひいと悲鳴をあげる事があると、彼は、

「お前さんも江戸っ児だ。辛抱しなさい。——この清吉の針は飛び切りに痛えのだから」

こう云って、涙にうるむ男の顔を横目で見ながら、かまわず刺って行った。また我慢づよい者が

グツと胆を据えて、眉一つしかめず休えていると、
「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ突っ張者だ。——だが見なさい、今にそろそろ疼き出して、どうにもこうにもたまらないようになろうから」と、白い歯を見せて笑った。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であった。その女の素質と容貌とに就いては、いろいろの注文があった。甞に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々満足する事が出来なかった。江戸中の色町に名を響かせた女と云う女を調べても、彼の氣分に適った味わいと調子とは容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧れながらも、彼はなおその願いを捨てずにいた。

丁度四年目の夏のとあるゆうべ、深川の料理屋平清の前を通りかかった時、彼はふと門口に待っている駕籠の簾のかけから、真っ白な女の素足のこぼれているのに気がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じように複雑な表情を持って映った。その女の足は、彼に取っては貴き肉の宝玉であった。拇指から起って小指に終る繊細な五本の指の整い方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合い、珠のような踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗うかと疑われる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを踏みつける足であった。この足を持つ女こそは、彼が永年たずねあぐんだ、女の中の女であろうと思

われた。清吉は躍りたつ胸をおさえて、その人の顔が見たさに駕籠の後を追いかけたが、二三町行くと、もうその影は見えなかった。

清吉の憧れ^{あこが}ごちが、激しき恋に変わってその年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であった。彼は深川佐賀町の寓居^{ぐうきよ}で、房楊枝^{ふさようじ}をくわえながら、錆竹^{さびたけ}の濡れ縁^{ぬゑ}に万年青^{おもと}の鉢^{はち}を眺めていると、庭の裏木戸^{おとな}を訪うけはいがして、袖垣^{そでがき}のかげから、ついぞ見馴れぬ小娘^{こな}が這入^{はい}って来た。

それは清吉が馴染^{なじみ}の辰巳^{はな}の芸妓^{おどり}から寄こされた使の者であった。

「姐^{ねえ}さんからこの羽織^{わえ}を親方へお手渡しして、何か裏地へ絵模様を画いて下さるようにお頼み申せて……」

と、娘は鬱金^{うこん}の風呂敷をほどいて、中から岩井杜若^{いわけとじやく}の似顔画のたとうに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出した。

その手紙には羽織のことをくれぐれも頼んだ末に、使の娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈^{はず}故^{ゆゑ}、私の事も忘れずに、この娘も引き立ててやって下さいと認^{した}めてあった。

「どうも見覚えのない顔だと思ったが、それじゃお前はどの頃^{ころ}此方^{こつち}へ来なすったのか」

こう云って清吉は、しげしげと娘の姿を見守った。年頃は漸^{よう}う十六か七かと思われたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂^{たま}を弄^{もてあそ}んだ年増^{としま}のように物凄^{ものすご}く整っていた。それは国中の罪と財^{たから}との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代ったみめ

麗^{うるわ}しい多くの男女の、夢の数々から生れ出^いすべき器量であった。

「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で帰ったことがあろうがな」

こう訊^{たず}ねながら、清吉は娘を縁へかけさせて、備^{びんご}後^{おもて}表の台に乗った巧^{こう}緻^ちな素足^{しそく}を仔細^{しさい}に眺めた。

「ええ、あの時分なら、まだお父さんが生きていたから、平清へもたびたびまいりましたのさ」と、娘は奇妙な質問に笑って答えた。

「丁度これで足かけ五年、己^{おれ}はお前を待っていた。顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。——お前に見せてやりたいものがあるから、上ってゆっくり遊んで行くがいい」

と、清吉は暇^{いとま}を告げて帰ろうとする娘の手を取って、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先^まずその一つを娘の前に繰^{ひろ}り展^{ひら}げた。

それは古^{いにしえ}の暴君^{ちゆうおう}紂王^{ちゆうわう}の寵妃^{ぼつき}、末喜を描いた絵であった。瑠璃^{るり}珊瑚^{さんご}を鏤^{ちり}めた金冠^{きんぐん}の重さに得堪^ええぬなよやかな体を、ぐったり勾欄^{こうらん}に靠^{もた}れて、羅綾^{らりよう}の裳裾^{もすそ}を階^{きざはし}の中段にひるがえし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲^{いけにえ}の男を眺めている妃の風情^{ふうせい}と云い、鉄の鎖で四肢を銅柱^{どうちゆう}へ縛^ゆいつけられ、最後の運命を待ち構えつつ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄^{ものすご}いまでに巧^{たくみ}に描かれていた。

娘は暫くこの奇怪な絵の面を見入っていたが、知らず識^しらずその瞳^{ひとみ}は輝きその唇^{くちびる}は顫^{ふる}えた。怪しくもその顔はだんだんと妃の顔に似通^{にかよ}って来た。娘は其^{そこ}処^こに隠れたる真^まの「己^{おれ}」を見出^み出した。

「この絵にはお前の心が映っているぞ」

こう云って、清吉は快げに笑いながら、娘の顔をのぞき込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」

と、娘は青褪めた額を擡げて云った。

「この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交っている筈だ」と、彼は更に他の一本の画幅を展げた。

それは「肥料」と云う画題であつた。画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れている多くの男たちの屍骸を見つめている。女の身边を舞いつつ凱歌をうたう小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑え難き誇りと歓びの色。それは戦の跡の景色か、花園の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜んでいた何物かを、探りあてたる心地であつた。

「これはお前の未来を絵に現わしたのだ。此処に斃れている人達は、皆これからお前の為めに命を捨てるのだ」

こう云って、清吉は娘の顔と寸分違わぬ画面の女を指さした。

「後生だから、早くその絵をしまつて下さい」

と、娘は誘惑を避けるが如く、画面に背いて畳の上へ突俯したが、やがて再び唇をわななかし

た。
「親方、白状します。私はお前さんのお察し通り、その絵の女のような性分を持っていますの
さ。——だからもう堪忍して、それを引っ込めておくんなさい」

「そんな卑怯なことを云わずと、もつとよくこの絵を見るがいい。それを恐ろしがるのも、まあ今のうちだろうよ」

こう云った清吉の顔には、いつもの意地の悪い笑いが漂っていた。然し娘の頭は容易に上らなかった。襦袢の袖に顔を蔽うていつまでも突俯したまま、

「親方、どうか私を帰しておくれ。お前さんの側に居るのは恐ろしいから」と、幾度か繰り返した。

「まあ待ちなさい。己がお前を立派な器量の女にしてやるから」と云いながら、清吉は何気なく娘の側に近寄った。彼の懷には嘗て和蘭医から貰った麻睡剤の壺が忍ばせてあった。

日はうららかに川面を射て、八畳の座敷は燃えるように照った。水面から反射する光線が、無心に眠る娘の顔や、障子の紙に金色の波紋を描いてふるえていた。部屋のしきりを閉て切つて刺青の道具を手にした清吉は、暫くは唯恍惚としてすわっているばかりであった。彼は今始めて女の妙相をしみじみ味わう事が出来た。その動かぬ顔に相對して、十年百年この一室に静坐するとも、なお飽くことを知るまいと思われた。古のメムフィスの民が、莊嚴なる埃及の天地を、ピラミッドとスフィンクスとで飾ったように、清吉は清浄な人間の皮膚を、自分の恋で彩ろうとするのであった。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ絵筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行った。若い刺青師の霊は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲んだ。焼酎に交ぜて刺り込む琉球朱の一滴々々は、彼の命のしたたりであった。彼は其処に我が魂の色を見た。

いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかかったが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかった。娘の帰りの遅きを案じて迎いに出た箱屋までが、

「あの娘ならもう疾うに帰って行きましたよ」

と云われて追い返された。月が対岸の土州屋敷の上にかかって、夢のような光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出来上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てていた。

一点の色を注ぎ込むのも、彼に取っては容易な業でなかった。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具え始めて、再び夜がしらしらと白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつつ、背一面に蠕った。

春の夜は、上り下りの河船の櫓声に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、霊岸島の家々の薨がきらめく頃、清吉は漸く絵筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めていた。その刺青こそは彼が生命のすべてであった。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であった。